The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Wash a Million Hands in Uganda 2011現地視察レポート「子どもたちの命を守る手洗いを、世界に広めたい。」
Author(s)	代島, 裕世
Citation	目で見るWHO. 2011, 47, p. 9-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

●アフリカからの報告　「100万人の手洗いプロジェクト」

Wash a Million Hands in Uganda 2011 現地視察レポート
「子どもたちの命を守る手洗いを、世界に広めたい。」

代　島　裕　世

Hirotsugu DAISHIMA
1965年　埼玉県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒。
1995年　サラヤ（株）入社。
現在、広報宣伝部部長。
「NPO法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン」理事

戦後間もない日本において、赤痢などの伝染病が多発する中、私が勤める会社は1952年に創業し、緑色の薬用石けん液と、点滴式石けん液容器を同時開発しました。それ以来、うがい薬と自動うがい器、アルコール手指消毒剤と自動手指消毒ディスペンサーなどの製品を開発し続け、日本の衛生環境の向上に貢献してきました。

薬用石けんで手を洗う日本の子どもたち（昭和高度成長期）

一方、開発途上国に目を向けると、現在、世界では年間810万人もの5歳未満の子どもが命を失い、その原因の多くは予防可能な病気と言われています。また、石けんを使って正しく手を洗うことで下痢性疾患や急性呼吸器感染症を予防すれば、100万人もの子どもたちの命が守られるとも言われています。2009年の新型インフルエンザの世界的大流行を経験し、正しい手洗いの大切さが再確認される中、世界の衛生環境の向上に貢献したいという思いから、2010年よりわれわれは手洗い普及が求められているアフリカ・ウガンダでのユニセフの手洗い促進活動の支援をスタートしました。製品売上げの一部を公益財団法人日本ユニセフ協会を通じて寄付して現地活動を支援しています。このプロジェクトが「100万人の手洗いプロジェクト」です。このプロジェクトは2010年から2012年までの3ヵ年、アフリカ・ウガンダで100万人以上の住民の方々に正しい手洗いを伝えることで、子どもたちの命を守ることを目標とし、具体的な活動は手洗い設備の設置、学校や地域の自主的な衛生活動の支援、小さな子ども持つ母親への啓発活動、現地メディアでの手洗いキャンペーンの展開など、設備を整えるだけでなく、住民が石けんを使った正しい手洗いを知り、自ら広めていくことを目指して進められています。

ユニセフが設置した手洗い設備で
手を洗うウガンダの子どもたち

●「ウガンダって、どんな国？」

支援対象国のウガンダ共和国は東部アフリカ、ケニアの西側に隣接する内陸国で、人口は3300万人以上（急増中）、平均高度1200m、年間平均気温23度、適度な年間降水量1000mm前後で緑豊かな大地を誇ります。県単位の少数民族自治政策を推進し、その首都カンパラはヴィクトリア湖の北部に位置しています。そしてヴィクトリア湖から流れ出すナイル川が縦に国土を貫いています。ウガンダ北部は20年以上にも渡り、反政府勢力（神の抵抗軍）と政府軍が武力衝突し、沢山の子ども兵士を生む惨劇の場となってきましたが、2006年の「敵対行為停止合意」署名以降、状況は改善され、約180万人の国内避難民の多くが帰還のプロセスに入っています、こうした状況からウガンダ北部では、安全な水、手洗い設備、学校、保健所といったインフラの整備が大きな課題となっています。首都カンパラ近郊であっても貧困地区では未だにコレラが蔓延するなど衛生環境は劣悪で、正しい手洗いは子どもたちの命を守る「命綱」と言

っても過言ではありません。しかし、2007年の調査によればトイレを使った後に石けんで手洗いを行う割合は僅か14%に過ぎませんでした。

ウガンダでは、乳幼児死亡率は1000人あたり79人、5歳未満死亡率では1000人あたり128人にも及びます（2009年）が、ウガンダ財務・計画・経済開発省（MoFPED）によれば、病気の75%以上は予防可能であると考えられています。ウガンダの乳幼児の2大死亡原因である下痢性疾患と急性呼吸器感染症は、適切なタイミングで石けんを使って手を洗うことで、下痢性疾患で35～50%、急性呼吸器感染症で23%も減らすことができるという報告もあります。今回のプロジェクト候補地選定では「国の一部が復興期にあり、避難民生活を経て帰還した住民の方々の健康のために、正しい手洗いの急速な普及が求められる場所」といった視点から、日本ユニセフ協会とともに協議を重ねた結果、ウガンダ共和国を支援対象国に決定しました。

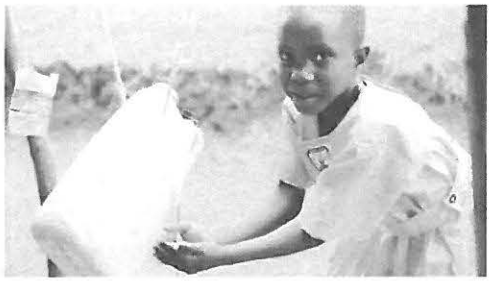
●「日本のみんなと思いを共有したい…2011　現地視察記をhttp://tearai.jp/で動画公開中」

2010年1月に支援開始したプロジェクトも初年度を終了し、2011年初めにユニセフ・ウガンダ事務所から2010年度活動報告を受け取りました。その活動成果を自らの目で確かめるべく、視察チームは2011年3月20日から25日現地視察を実施しました。出発直前の3月11日、「東日本大震災」により日本は未曾有の大災害に見舞われました。今回の視察では、ウガンダから復旧を目指す日本に勇気をもらうことも目的にして、予定通り視察を決行しました。

「3月20日 日曜日　ウガンダ到着」

関西空港を出発してUAEのドバイで乗換え、ヴィクトリア湖畔に位置するウガンダのエンテベ空港まで約18時間の空路長旅を終え到着ロビーを出ると、ユニセフのスタッフが待っていてくれました。東日本大震災の被災状況を大変気にしてくれていたので、今回の視察が日本の被災地へのメッセージにもなることを伝えました。ウガンダでは今年2月に大統領選挙があり、1986年就任以来、安定政権を維持してきたムセベニ大統領が圧勝して4選を果たしていました。これで当面は政治不安を回避できると思われます。到着したのが日曜日だったせいか、市街地に向かう幹線道路は大渋滞でしたが、無事に首都カンパラに入りました。

○視察1日目



Tippy Tap（簡易手洗い設備）を使う少女

3月21日月曜日はユニセフ・ウガンダ事務所で視察目的と予定を確認し、早速、西部のKIBOGA県へ出発。今年初めて訪問するKambugu小学校で先生と子どもたちの歓待を受けました。力強い女性の校長先生の説明で、活動の進捗と現場の要望を聞いた後、少し恥じらい気味の低学年の子どもたちがTippy Tap（簡易手洗い設備）の実演を素敵な歌にのせて見せてくれました。

力強い演説口調の校長先生

その後、今回の視察で現地が最も力を入れてアレンジしてくれたHOIMA県Buhimb Sub Countyの「3月22日世界水の日」イベント会場へ。夕方、現地に到着すると、翌日のイベントのために村民ボランティアのHand washing ambassadorによってTippy Tapの作り方の講習会が開かれていました。

村の手洗いリーダーによるTippy Tap講習会

興味深いのはTippy Tapの紐付き固形石けんに、半分に切ったペットボトルが被せてある理由です。それはヤギ対策だったのです。ヤギが固形石けんを食べてしまうようです。講習会の参加者は明日のイベントの主役のようでした。

石けんを食べるヤギ対策にPETボトルカバー

○ 視察２日目

３月22日火曜日は「世界水の日」の大イベント当日。まず、HOIMA県のモデル地区になっているNgogoma Villageへ向かいました。モデルハウスを取材、伝統的な村の暮らしの中で、Tippy Tap はもちろん、衛生的なトイレ管理、省エネかまどを住民が自信に満ち、満面に笑みをうかべて説明してくれました。

「3月22日　世界水の日」の演奏パレード

そして「世界水の日」イベント会場に到着、このHOIMA県の主要部族は、穏やかな性格といわれるニョロ族です。ウガンダは多民族国家です。その中で、ニョロ族はかつて17世紀中ごろに最盛期を迎えたブニョロ王国を築いた名門部族です。（19世紀には現在の王族を擁したブガンダ王国が全盛期を迎えることになります。）ニョロ族は穏やかな民族と言っても、パレードやダンスは、さすがにアフリカの息吹を感じるエモーショナルなパフォーマンス（Webで動画公開中）。

ニョロ族のダンス

手洗いの大切さを説く寸劇では、まだまだ霊媒師（Witch Doctor）が暗躍していることを警告し、疾病の元凶が何なのかを科学的に解明し、一番大切な予防手段は手洗いであると訴えかけました。

イベント終盤には最優秀、優秀、優良、良まで４段階でHand washing ambassadorを表彰するセレモニーがおこなわれ、賞品として、それぞれ頑強な自転車（中国製？）、マットレス、ラジオ、Tippy Tap製作用のジェリー缶が授与されました。

村のボランティア手洗い大使たち

このようなキャンペーン実施地区では、民衆の間にも着々と手洗いの意識が向上していることが伝わってきました。この日はウガンダ各地で同様のイベントが開催されているとスタッフから説明ありました。

一度身につけてしまえば、やらないと気持ち悪くなるのが衛生習慣の特長、最初はもの珍しくても良いから強く印象付けることが重要だと思いました。

イベント最後のHOIMA県Chair Person（知事）の演説の終わりに、日本からやって来た視察チームが紹介され、東日本大震災の被災状況についても説明をされました。続いて、イベント参加者全員で黙祷が捧げられました。

イベント会場全員で東日本大震災に黙祷

イベントの取材を終えると、街の中心部にあるFMラジオ局「Liberty FM」Broad Casting Service を訪問。「手洗い」についてDJとリスナーが賑やかなコミュニケーションを展開する特別番組を取材。「手洗いってカッコいいのだ！」と感じさせるDJ。この局のスロ

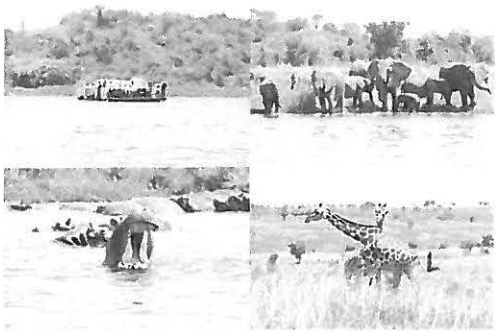
ーガンは「The Light of Mu nyoro」（ニョロ族の光！）。国を挙げての手洗いキャンペーンテーマはHands washed with soap and water are「HANDS TO BE PROUD OF」（石けんと水を使って洗った手こそ、誇らしい手になる！）、これがウガンダ全土に漏れなく拡がっていくことが最終目標になるのだと思います。

ニョロ族の光、Liberty FM局

手洗いキャンペーンを報じるDJ

○３月23日水曜日、視察３日目

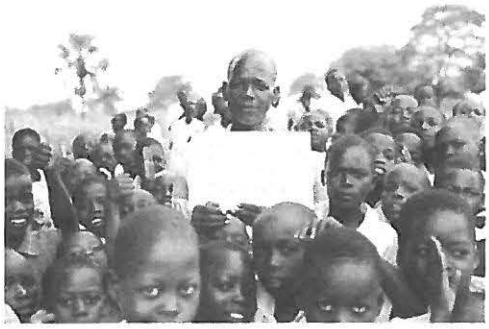
ウガンダ北部へ向かうため、マーチンソン滝 国立公園を抜け、アルバート湖へ流れ込むヴィクトリア・ナイル川を渡ってウガンダ北部に移動するルートを取りました。凸凹の未舗装道路を国連の四輪駆動車で疾走、アフリカゾウ、カバ、ウガンダキリンなど沢山の野生動物たちに出会えました。国立公園の緑の大平原を眺め、ウガンダの豊かな原風景を見たような気がしました。


ヴィクトリア・ナイル川を渡るUN車
アフリカゾウ！カバ！ウガンダキリン！

GULU県に到着するとユニセフGULUの職員と合流し、北部を代表するアチョリ族のPADER県へ向かいました。去年はほとんど何もできていなくて支援校に指定したAmilobo小学校を再訪。旧校長先生も来てくれていました。ユニセフによって設置された手洗い設備を確認し、新校長先生を取材。新たに生徒によって組織されたSanitation Clubが校内活動を開始していました。

Sanitation Club

これはとても大きな進歩で、生徒たちは自発的に手洗い習慣を身に付けていました。手洗い設備は人目に付く教室の前などに設置されています。壊されたり、盗難にあってしまうことを防ぐ措置です。残念ながら、昨年壊れていたコンクリートで土台をつくった大きな樹脂性の雨水タンクは修理するのが困難だったようで、そのまま放置されていました。自分たちで継続的にメンテナンスできることの大切さを痛感しました。ここで日本復興応援メッセージを撮影、スケッチブックに書かれたメッセージはアチョリ語で「BED MA CWINYU TEK JAPAN！」（Don't Worry！ JAPAN＝負けるな、ニッポン！）。


「負けるな、日本！」アチョリ語

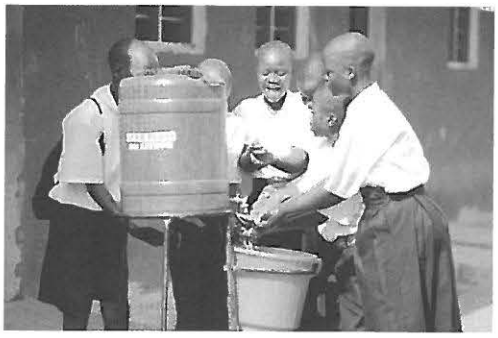
○３月24日木曜日、視察４日目

やはり昨年支援校に指定したAcholibur小学校を再訪。生徒組織のHealth ClubがPoem "Personal Hygiene" をみんなで朗読してくれました。ユニセフが設置した手洗い設備を生徒たちが日常的に活用している様子

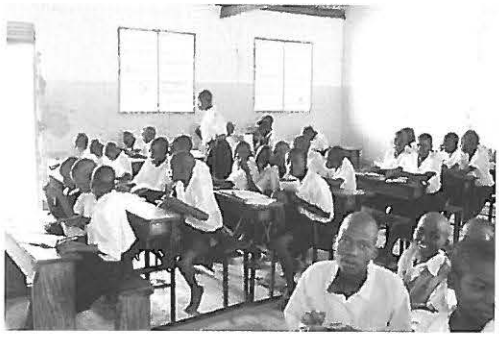
を取材することができました。

典型的な手押し井戸

学校横にある手押し井戸（たぶんインディーマークⅡ?）に水汲みにいくのも生徒たちの日課です。説明してくれた若い男性教諭からはひしひしと熱心さが伝わってきました。大切なのはリーダーの意識の変化だと思いました。



UNICEF が設置した手洗い設備



みんな勉強熱心

ここでも日本復興応援メッセージを撮影、アチョリ語で「WUBED KI TEK CWINY JAPAN! 」（To have Strong Heart, JAPAN！＝強い心を持って、ニッポン！）と力強く唱和してくれる姿に感激。

復路は一気に小型飛行機に乗り、１時間半程度で首都カンパラに戻りました。

○ 視察５日目　最終日

３月25日金曜日朝、ウガンダ日本大使館を表敬訪問した後、ユニセフUGANDAでミーティングを実施、今回の「手洗い」キャンペーンのラジオCMの英語とルガンダ語のCD、TVCMのDVDを受け取り、今後の支援継続を確認しました。このミーティングの中でユニセフUGANDA事務所の方が「セレモニーから習慣に変わっていくこと、持続可能な活動にすることが大切」と言っていたのが印象的でした。今回の視察でユニセフ・ウガンダからの報告書に記載されていたわれわれの重点支援項目、対象県でのTippy Tap設置、国を挙げてのThe National Hand Washing Campaignの成果が確認できました。ウガンダは「豊か」です。視察中の現地の人から「この国に餓死はない」と聞きました。そして、ウガンダがアフリカの衛生模範国になる可能性を実感しました。視察チーム全員、今回の視察を終えて衛生分野の専門メーカーとして支援を継続する決意を新たにし、現地と日本の“絆”をしっかりと確かめることができました。

●現地法人設立

最後にウガンダの首都カンパラに現地法人SARAYA East Africaを設立したことをご報告します。この決定は、ユニセフ支援で得た情報をもとに、次段階ではCharity（慈善）ではなく、現地にOpportunity（機会）を提供したいという思いに端を発しています。2012年から本格的に始動し、東アフリカを対象地域として、ウガンダを本拠地に衛生事業を展開していきます。